3 考　察

日本々土に於ける浅蜊，蛤の多産地は東京湾，有明海，瀬戸内海，三河湾等と謂われ波静穏，潮流良好，淡水注入し，海底平坦で細砂8～6の砂泥（蛤）又は細砂に多少の泥土（蜊）を混入する処で潮汐の干満差が甚しくなく塩分は比重2C～24（蛤）又は15～23（蜊）位の所である。屋我地南部地先は日本の多産地の条件が合致しているので蛤，蜊（屋我地先）の養殖場として適当であると思われる。然しアジモが生えているため底質硬くその儘に於ける蒔付では貝の土中潜入に困難すると思われるから，馬鍬により除去すれば尚一層の成果を得られると思われる。済井出地先は季節風の影響を受ける事が大きく且泥土少く，内湾に比して不適と思われる。羽地々先は各川による浮泥被害や降雨期や暴風時の就度激変頻度が多いと思われる。此のため適当とは言えない。

(7) 海　苔　調　査

1　調査地及期日

兼国村に於ける海苔調査，57年4月21日～23日，　3日間

2　調査経過

北岸の海苔は老齢期に至り外縁は千切れ落ち根の一部を残す程度に褪色して灰緑色を呈していた。着生場所は図示の通り棚状になった処で当時（旧3月22日17時干潮時）海面から6尺位上位に露出し飛沫もかゝらず乾燥状態の礁岩面に張りついていた。風向SE。着生場所の状況から推して北風の時飛沫のかかる点にあり，其の品種は久米島，伊江島等の岸に産する岩のりであろうと思われる。（鹿児島大学水産学部教授理学博士田中剛氏鑑定によりツタシアマノリと判明）。北西岸の状況も同品種であつたが双方共着生面積が少く，北岸が40坪位北西岸が20坪位と推定された。船付場附近にヒトエグサが着生し未だ発育の様で濃緑色を呈して一者に繁茂していた。東北岸一帯はアサノリが多く，浜には打寄せられて堆積していた。ヒトエグサは少なかつた。住民によれば船付場附近には少量のバフンウニがあり東北岸にはムラサキウニが多量に棲息する。住民は卵巣充実期に蒸煮で食用に供する由。

(8) 食用蛙及漁業状態の調査

1　目　的

伊平屋村に於ける日名地，ハザマ用水池の放養食用蛙の繁殖状況及同村の漁業状態の調査

2　期　日

1957年5月14日～19日まで6日間